

2024年2月25日 主日礼拝 受難節 第2主日

説教題：「安心して行きなさい」 聖書箇所：ルカによる福音書8章40-56節（120頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讃美歌93 - 1 - 31 交読詩編：第66編1 - 12節（69頁）

讃美歌：83／297（栄えの主イエスの）／298（ああ主は誰がため）／303（丘の上の主の十字架）／27

「今週の聖句」〔イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」〕（ルカ伝8：48）

「牧師室の窓」「鎌倉の修道院に学びしは春まだ浅き受難節の日々」

「早春の修道院の裏山に主の受難模(も)す道を歩みし」

(1) 皆様おはようございます。教会の暦では、今月(2月)14日の水曜日から「受難節(レント)」が始まり11日間が経過しました。受難節(レント)は「四旬節」(40日間と言う意味)ともいわれています。キリストの苦しみと十字架の死を記念する期間であり、日曜日を除くと40日間です。主の復活(イースター)から逆算して、毎年水曜日から始まります。その水曜日のことを「灰の水曜日」と呼んでいます。「灰」はヨブ記2章では懺悔の象徴であり、イザヤ書61章では嘆き・悲しみの象徴です。新約聖書のマタイ伝福音書11章には「灰をかぶって悔い改めた」と書かれています。

「灰」と言う言葉にも聖書時代の人々の生活が垣間見ることが出来ます。何気ない言葉や品物の中に人々の生活が見え隠れしますので、聖書を読むことは宝探しをするようで興味深いですね。

(2) 今日の聖書箇所は2つの物語がサンドウィッチ状態に書かれています。瀕死の状態にある12歳の一人娘の命を救出して欲しいとの緊急要請がイエス様のところに飛び込んできます。その救出に向かう道の途上に、12年間もの間出血が止まらない病気で苦しんでいた女性を助けるという出来事が重なった物語です。何故、この2つの物語が同じ場面に書かれているのでしょうか。何故、二人の主人公は命が助かり、病気が治ったのでしょうか。…私たちの目からすると、馬鹿馬鹿しいお話し、程度の低い奇跡物語ですねと、一笑に付して、くずかごに入れてしまいそうです。…でもよく考えますと、瀕死の状態も、病気の苦しみも、私たちの人生では避けて通ることが出来ません。その悲しみを、苦しみを乗り越えることは人生をしっかりと見つめることであります。

(3) 今日の聖書箇所は8章40節から始まります。イエス様と弟子たちはガリラヤ湖の対岸にある異邦人(外国人)の土地から小舟に乗って戻ってこられました。ガリラヤの人々は皆、イエス様の帰りを待っていたのです。何故ならば、イエス様は病気を治し、死んでしまった若者の生き返らせたのであり、種蒔きの分かり易い譬え話などで人々に語り掛け、人気を博していたからです。そのイエス様のところにユダヤ教の会堂の管理者であるヤイロが来ました。会堂長は地元の有力者でもあります。そのヤイロがイエス様の足もとにひれ伏して、「一人娘」が死にかけており、自宅に来て助けに来て欲しいと懇願したのです。皆様にもこのことの深刻さ、緊急性、心からの懇願の状

況が伝わってくることでありましょう。ヤイロと言う人物をこの場面から読みとることが出来ます。イエス様はヤイロの謙虚な人柄と信仰の深さから応諾しました。

…やや脱線しますが、ルカ福音書には「一人」や「一つ」という「唯一の」と言う表現がしばしば表れています。7章1節～10節にある百人隊長の僕(しもべ)をいやす場面では百人隊長がイエス様に「ひと言おっしゃってください」と言っています。同じ7章11節以下の書かれているのは、やもめの「一人息子」を生き返らせる話です。9章37節でも「一人息子」を助けます。15章には「見失った一匹の羊」と99匹の羊の話が、同じ15章には「無くした銀貨1枚」の話、そして「死んでいたのに生き返った(一人の)放蕩息子」の話が書かれています。16章の「不正な管理人のたとえ」話には「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である」と書かれています。ルカ福音書は「たった一人」や「小さな状況」、「弱い立場」に目を注ぐ、光を当てていることが特徴であると考えられます。…一つ、小さい、ということについて、私には今でも印象の強い思い出があります。それは自動車部品のことです。1台の自動車は約3万点から4万点の部品から出来上がっています。ネジ1本がなくても自動車は安全に走ることは出来ません。ネジの1つ1つが大切なのです。その部品を世界中に販売している大手の会社が日本ではその当時5社ありました。その内の3社を私は信徒で職業人時代に担当していました。東ヨーロッパやアフリカ、中南米の隅々までにネジ1本1本を販売しているからこそ日本の自動車会社は世界各地で自動車を販売し走らせることが出来るのです。私はそのネジ1本1本の働きが人々の生活を支えていることを思いつつ、金融の知識や外国為替の技術で応援していました。ネジ1本の働きと言うのは、聖書の御言葉を丁寧に読むことにも通じてきます。

(4)聖書の話に戻ります。12年間も出血が止まらなかった一人の女性がいました。43節には「医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえな」かったと書かれています。12年間の年数とはどの様な期間でありましょうか。皆様も12年前と較べてみて下さい。日本では12年プラス1年前に東日本大震災が起こり、震災からの復旧・復興の年数でした。来月には13年目を迎えることになります。この女性の12年間は悩みと苦難の長い歳月であったことでしょう。44節を読むと皆様は何か気が付かれましたでしょう。44節〔(8:44)この女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れると、直ちに出血が止まった。〕何に気が付かれましたでしょうか？…この女性は、イエス様の服の端にほんの僅かでも触れれば病気が治るかの知れない、と言う希望があり、持ち続けていたのです。旧約聖書の出エジプト記29章(37節に)「(聖別された祭壇は神聖なものとなり) 祭壇に触れるものはすべて、聖なるものとなる。」と書かれています。ルツ記2章(13節)には「あなたのはしための一人にも及ばぬこのわたしですのに、心に触れる言葉をかけていただいて、本当に慰められました。」とも書かれています。今日のこの主人公である女性にとっては、イエス様がなさった数々の癒しの出来事を人づてに聞いていたことでしょう。特にル

ルカ7章の後半に記されている罪深い女を赦されたお話は印象強く心に刻み付けられていたと思います。今日の主人公にとっては自分が患っている長年の病気は、体の病気と言うよりは、罪の一つと考えられていたからです。でも、現代人から見れば「服の房に触れると」は馬鹿げていると思われるでしょう。いいえ、決してそのようなことはありません。池袋から少し離れた所にある「巢鴨のとげぬき地蔵」では病気を治してくるとの願いを持つ人が沢山訪れていますね。また、鎌倉では「銭洗い弁天」がお金を増やしてくれるとの願いを持つ人が沢山訪れています。いずれも切ない願いでもあり、おおらかな望みでもあります。併し、今日の主人公は群衆の中をかき分けて、かき分けて、イエス様のすぐそばまで来たのです。この主人公は、願いを込めて、手を伸ばし、手を伸ばしてイエス様の「服の端っこに触れ」たのです。皆様がこの主人公ならばどの様に行動したでしょうか。私にはそんなことは出来ない、無理だと諦めてしまうでしょうか。それとも信じてイエス様のすぐ近くまで進み出て「服の房に触れ」るでしょうか。このことは、「信じること」と「頑張ること」とは異なる、違うと言うことを理解しなければなりません。私たちの身の回りには「頑張きなさい」と言う言葉が溢れています。それと同時に「頑張らなくても良い」と言う言葉も溢れています。…以前も申し上げましたが、この国では、物事を考える、選択する時に、「二者択一（二つの中から選び、或いは区分する）」と言う考え方が染み付いています。○か×か、赤か白か、正しいか間違っているか、合格か不合格か、右か左か、敵か味方か、などなど、で物事を理解したり、判断したりする癖、思考方法がはびこっています。日本のこの国ではほぼ単一の人種によって歴史が刻まれてきました。多様な人種の混在があったのは、今から約千四五百年前の大和朝廷以前の時代か、四百年前の安土桃山時代には物事を多様な機軸で判断する時代があったのです。…私は信徒時代の大阪勤務時代にクリスチャン大名であった高山右近や明智光秀の娘であったクリスチャンの細川ガラシャのことを学びました。右近やガラシャの生き方は困難な時代にあって物事をしっかりと考えて信仰を大切に生きていくことを私は学びました。

(5) イエス様は今日の主人公の女性がご自身の服の端に触れたことを感じ取り、誰が触れたのかを尋ねましたが誰もがそうではないと答えました。46節を見てみましょう。〔(8:46)しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。〕

この46節はイエス様をご自身の服に触れた人物が誰であるのかを問い質そうとしているものではありません。イエス様はその人と直接対話したいとの希望を持っているのです。つまり、言葉を変えて言えば、キリストは時空を超えて私たちと、直接に話がしたい、会いたいと言っているのです。何故ならば、今日の聖書箇所は、ルカ伝の8章の中に含まれているのです。ルカ伝第8章の主たるテーマは何でありますでしょうか。8章のメイン・テーマは種を蒔く人の話です。その中心となる御言葉は8章15節です。〔(8:15)良い地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。〕 私たち人間を小麦の種蒔きの種に譬えるならば、道

端に落ちるのではなく、石地でも、茨の中に落ちるのではなく、良い土地に落ちて御言葉を聞き、良く守り、忍耐して実を結ぶ人となることを願っているのです。そして、8章22節以下にあるように、嵐のガリラヤ湖で人生の荒波に息絶え絶えになっている弟子たちを、即ち、私たちを守り導かれているのです。今日の聖書箇所はこの女性に対してイエス様が言われた言葉〔(8:48) …「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」〕とはこの主人公に対する直接的な会話であります。このことはサムエル記上第3章に書かれている〔(サム上3:9)主よ、お話しください。僕は聞いております。〕に対応するイエス様ご自身の言葉であると言えます。

(6) その様に読んでいきますと、会堂長ヤイロの12歳の病気の娘が病死してしまったとの知らせに対して、イエス様は〔(8:50) …恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。〕と言われました。そして、54節〔(8:54) イエスは娘の手を取り、「娘よ、起きなさい」と呼びかけられた。〕その娘は起き上がりました。この54節の言葉も、人生の日々の中で、ある時には病床にあり、死の床にある私たちに対するイエス様からの直接の呼び掛けであります。つまり、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」と「娘よ、起きなさい」とは、言葉の音声こそ異なっても、私たちに対する直接的な呼び掛けであり、私たちはその御言葉によって新たな人生を生きることが出来ることを示しております。56節には〔(8:56) 娘の両親は非常に驚いた。イエスは、この出来事をだれにも話さないようにとお命じになった。〕と書かれています。これは医学的な医療でもなく、魔術的な行為でもなく、信仰の対話であるからです。8章8節でイエス様は種蒔く人の譬えの中で「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われました。聞く耳があってこそ信仰の種は「百倍の実を結ぶ」のであります。ルカによる福音書の8章は興味深い箇所であると思います。

・・・お祈りいたします。